「汝、何者ぞ！そして飛翔の時」

篠田克巳

現在、世界中のカトリック教会は「来る３００年期の教会のあるべき姿を共有する」ためにシノドスの歩みを続けています。大塚司教様の２０２３年度年頭書簡タイトルも『わたしのシノダリティを創ろう』です。

教会としてのシノダリティは私たち一人ひとりのシノダリティに基づくもので、私たち一人ひとりは自分の信仰に基づき少しでも教会を良くし福音宣教をしようとの思いでいます。

今こそ一人ひとりの信仰が問われています。また唐崎教会は今でこそコロナ禍の影響で活動は停滞していますが、コロナ以前の唐崎教会は「小さいがよくまとまっている家庭的な教会」と評価され、幼児からご高齢の方まで各世代のバランスも良く、子供たちの信仰教育にも熱心で、青年たちも小教区を超えた仲間達とのつながりの中で信仰を育てていました。

「信仰を育てていました。」と過去形にしたのはコロナ禍３年の試練を受けた唐崎教会は冷え切り隙間風は吹いているように思えるからです。

確かに一人ひとりの思いは以前にも増して強いものがあり「何とかしなくては」との思いの表れなのでしょうが、果たしてそれが本当に神の思い（わたしのシノダリティ）なのでしょうか。私の意地を通しているだけなのではないでしょうか。天国の入門試験の時「汝、何者ぞ。私はお前を知らぬ。」と言われてからでは遅いのです。そうならぬために私の自我を一枚一枚脱ぎ捨て最後に残った姿を見つけ事こそが重要で、神が私に期待する姿「わたしのシノダリティ」であるとの思いから私の今年のテーマ「汝、何者ぞ」を設定し、何かを言ったりしたりする前に「このことは自我なのか、キリストの言葉なのか」を識別することは難しいことですが、あまりでしゃばることはしないようにしています。

更に、教皇フランシスコは２０１３年３月27日の一般謁見で『他者と出会うために「出かけて行きましょう」。他者に近づくために「出かけて行きましょう」。私たちの信仰の光と喜びを差し上げるために「出かけて行きましょう」。常に出かけて行きましょう、神の愛とやさしさ、そして尊敬の気持ちと忍耐の心をもって出かけて行きましょう。』と呼びかけられました。

また２０１３年５月18日の聖霊降臨徹夜祭の一般信徒への講演でも『私にとって大切な言葉は「出会い」です。他者と出会いなさい。・・・貧しい人々と出会うことです。』と言われ、『あなた方が施しをしたとき、相手の目を見ていましたか。相手に触れましたか。あるいはコインを彼か、彼女に放り投げましたか。』（２０１３年５月18日の聖霊降臨徹夜祭の一般信徒への講演から抜粋）とも言われました。

唐崎教会の中にも貧しい人の目を見、手に触れている人がいないわけではないのです。彼らの声を聴き、支援するシステムが出来ていないことが現状であり、今の教会を組織としても変えることにより「出かけて行く教会」となることができるでしょう。

今日、私たちは多くの災難に直面しています。コロナ、地震、地球温暖化、そして戦争の恐怖に直面しています。悪魔の得意技は「分裂を引き起こす」ことだと誰かが言っていましたが、教会の中にも悪魔の手による「分裂」の兆候が見て取れます。しかし、神は悪魔の仕業まで救いの計画に組み込まれ、意見の違いを調和へ一致へと導かれます。その神の業に信頼し、神の声を聴き取り、勇気をもって変わることで３００年期の教会の姿が見えてくることでしょう。

私自身への叱咤激励でもあるのですが、保身にとどまらず、居心地の良いぬるま湯から飛び出し、今こそ大きく成長する時です。

飛翔の時！さあ！今こそ船出の時！